



平成 17 年度が、慌しく始まった。学年担任や各主任の発表をしてからの職員室の教職員の動きは、新メンバーとともに急変する。新学年の準備は勿論、校務分掌の今年度の計画の提案準備に加え、入学式の準備もある。もっと、時間的な余裕が欲しいと毎年思うが、現状からは仕方ない面もある。

その準備のひとつに、学級経営案の作成がある。学校の様式に則り、子どもの実態を踏まえ、このような子どもに育てたいと学級目標や学級組織を記載する。そして、学期末には、自分の学級経営の自己点検や自己評価をするのが普通ではなかろうか。

しかし、いつも疑問に思っていたことがある。それは、学年目標や学級目標がどこから考えられたものかということである。昨年度の同学年の目標から考えられたものか、これまでの経験から考えられたものか、教育雑誌を参考にしたものか。本来は、自校の学校教育目標や目指す子ども像から下りてきたものが、学年目標であり学級目標となる。最近、学校教育目標と成果との関係が問われているが、学校の目指す子ども像は、小学校では 6 年生を最終イメージとして作られているはずである。

したがって、その学校の各学年の実態、あるいは低・中・高学年の発達段階を考えて、目指す子ども像を考える必要がある。本校では、知育・徳育・体育からの目指す子ども像をさらに、低・中・高学年における目指す子ども像を考えた。当分は、この低・中・高学年の目指す子ども像から、学年（学級）目標を考えることにしている。そして、早い時期に全学級の学級目標を互いに知らせ合い、整合を図っている。隣の学年の学年（学級）目標と逆転を起こすことがないように十分気をつけたいものだ。学年（学級）目標はあくまで、学校教育目標の具現化のために設定するものである。これらの目標を達成させるために、意図的・計画的な営みとしての日々の教育実践があることを忘れまい。（芝）